

## 【日本昔ばなし】姨捨山

動画リンク: <https://youtu.be/wpN4LSWk24s>

今回は日本の昔ばなし、「姨捨山」を学びながら、日本語を勉強しましょう。

この動画は、1部、2部、3部に分かれ、3段階のスピードで聴くことができます。1部、2部、3部の順にスピードは速くなり、ふりがながあるのは1部のみです。学習にお役立てください。

はじめに。

お話を始める前に、昔ばなし・童話・おとぎ話の違いについて少し説明します。

### ■昔ばなし

「昔ばなし」には、昔から語り継がれてきた話という意味があります。語り継がれてきた話なので、作者が誰かはわかりません。

### ■童話

子供が読むことを前提に作られた物語です。作られた物語なので、当然作者は存在します。

### ■おとぎ話

子供に語って聞かせるための「昔ばなし」や童話のことです。おとぎ話の中には語り継がれてきた昔ばなしも、そして創作である童話も含まれます。

「姨捨山」は、とても有名な日本の昔ばなしです。

それでは「姨捨山」のお話を始めます。

むかし、信濃国に一人の殿様がいました。

殿様は大層おじいさんやおばあさんがきらいで、「年寄りはきたならしいばかりで、国のために何の役にも立たない。」といて、七十を越した年寄りは残らず島流しにしてみました。

流されて行った島にはろくろく食べるものもありませんし、あったとしても、体の不自由な年寄りにはそれを自由に取って食べることはできませんでしたから、みんな行くとすぐ亡くなりました。

国中の人は悲しがつて、殿様をうらみましたが、どうすることもできませんでした。

この信濃国の更科という所に、おかあさんと二人で暮らしている一人のお百姓がいました。

ところがおかあさんが今年七十になりますので、今にも殿様の家来が来てつかまえて行きはしないかと、

お百姓は毎日そればかり気になって、畑の仕事もろくろく手がつきませんでした。

そのうちとうとうがまんができなくなって、

「無慈悲な役人なんぞに引きずられて、どこだか知れない島に捨てられるよりも、これはいっそ、自分でおかあさんを捨てて来た方が安心だ。」と思うようになりました。

ちょうど八月十五日の晩でした。真ん丸なお月さまが、野にも山にも一面に照っていました。

お百姓はおかあさんのそばへ行って、何気なく、「おかあさん、今夜はほんとうにいい月ですね。お山に登ってお月見をしましょう。」

といって、おかあさんを背中におぶって出かけました。

さびしい野道を通り越して、やがて山道にかかりますと、背中におぶさりながらおかあさんは、道ばたの木の枝をぽきんぽきん折っては、道に捨てました。

お百姓はふしぎに思って、「おかあさん、なぜそんなことをするのです。」とたずねましたが、おかあさんはだまって笑っていました。

だんだん山道を登って、森を抜け、谷を越えて、とうとう奥の奥の山奥まで行きました。山の上はしんとして、鳥のさわぐ音もしません。

月の光ばかりがこうこうと、昼間のように照り輝いていました。

お百姓は草の上におかあさんを下ろして、その顔をながめながら、ほろほろ涙をこぼしました。

「おや、どうした。」と、おかあさんがたずねました。お百姓は両手を地につけて、「おかあさん、ごめんなさい。」

お月見にといってあなたを誘い出して、こんな山奥へ連れて来たのは、今年はおあなたがもう七十になって、いつ島流しにされるか分からないので、

せめて無慈悲な役人の手にかけるよりはと思ったからです。どうぞがまんしてください。」といいました。

するとおかあさんは驚いた様子もなく、「いいえ、わたしには何もかも分かっていました。」

わたしはあきらめていますから、お前は早くうちへ帰って、体を大事にして働いてください。さあ、道に迷わないようにして早くお帰り。」といいました。

お百姓はおかあさんにこういわれると、よけい気の毒になって、いつまでもぐずぐず帰りかねていましたが、

おかあさんに催促されて、すごすごと帰って行きました。

道に捨ててある木の枝を頼りにして歩いて行きますと、長い山道にも少しも迷わずにうちまで帰りました。

「なるほど、さっきおかあさんが枝を折って捨てて歩いたのは、わたしが一人で帰るとき、道に迷わないための用心であったか。」

と、今更おかあさんの情けがしみじみうれしく思われました。

そんな風でいったんは帰ったものの、縁先に座って、一人ぼつねんと山の上の月をながめていますと、もうじっとしてられないほど悲しくなって、涙がぼろぼろ止めどなくこぼれてきました。

「あの山の上で、今ごろおかあさんはどうしていらっしゃるだろう。」こう思うと、お百姓はどうしてもこらえていられなくなりました。

そこで夜更けにかまわず、またさっきの道をたどって、あえぎあえぎ、おかあさんを捨てて来た山奥まで上がって行きました。

そこに着いてみると、おかあさんはちゃんと座ったまま、目をつぶっていました。お百姓はその前に座って、

「おかあさんを捨てたのはやはりわたくしが悪うございました。こんどはどんなにしてもおそばについてお世話をいたしますから。」

といて、おかあさんをまたおぶって山を下りました。

それにしてもこのままおけば、いつか役人の目にふれるに違いありません。

お百姓はいろいろ考えたあげく、床の下に穴倉を掘って、その中におかあさんをかくしました。

そして毎日三度ご飯を運んで、「おかあさん、窮屈でも、がまんをしてください。」と、いろいろいたわりました。

これでさすがの役人も気がつかずにいました。

それからしばらくすると、ある時お隣の国の殿様から、信濃国の殿様に手紙が来ました。

あけてみると、「灰の縄を作って見せてもらいたい。それが出来なければ、信濃国を攻めほろぼしてしまう。」と書いてありました。

その国は大層強くて、戦争をしてもとても勝つ見込みがありませんでした。

殿様は困ってしまって、家来たちを集めて相談しました。けれどだれ一人、灰の縄なんぞを作ることを知っている者はいませんでした。

そこでこんどは国中におふれを出して、「灰の縄を作ってさし出したものには、たくさんの褒美をやる。」と、告げ知らせました。

すると、何しろ灰の縄が出来なければ今にもこの国は攻められて、ほろぼされてしまうというので、国中のお百姓は集まるとこの話ばかりしました。

「だれか灰の縄を作れる者はいないか。」こういってさわぐばかりで、一向にいい考えは出ませんでした。

お百姓はふと、「これはうちのおかあさんが知っているかもしれない。」と思いつきました。

そこで、そっと穴倉へ行って、おふれの出たことを詳しく話しますと、おかあさんは笑って、

「まあ、それは何でもないことだよ。縄によく塩をぬりつけて焼けば、くずれないものだよ。」といいました。

お百姓は、「なるほど、これだから年寄りにはばかにできない。」と心の中で感心しました。

そしてさっそくいわれたとおりにして、灰の縄を作って、殿様の御殿へ持って行きました。

殿様はびっくりして、御褒美のお金をたくさんいただきました。

とても出来まいと思った灰の縄を出して渡されたので、お隣の国の使いは逃げて行きました。

しばらくすると、またお隣の国の殿様から、信濃国へお使いが一つの玉を持って来ました。

いっしょにそえた手紙を読むと、「この玉に絹糸を通してもらいたい。それが出来なければ、信濃国を攻めほろぼしてしまう。」と書いてありました。

殿様は、その玉を手にとってよく見ますと、玉の中にごく小さな穴が曲りくねってついていて、どうしたって糸の通るはずがありませんでした。

殿様は困って、また家来たちに相談しましたが、家来たちの中にもだれ一人、この難題をとく者はいませんでした。

そこでまた国へおふれを出して、「曲りくねった玉の穴に絹糸を通す者がいたら、たくさんの褒美をやる。」と告げ知らせました。

これでまた国中のさわぎになりました。けれどやはりだれにも変わった知恵の持ち合わせはありませんでした。

すると、こんどもお百姓は穴倉へ行って、おかあさんに相談をしました。おかあさんは笑って、

「何でもないことだよ。それは、玉の穴のまわりにたくさん蜂蜜をぬっておいて、絹糸に蟻を一匹むすんで、別の穴から入れてやるのです。

すると蟻は蜜の香りをたどって、曲りくねった穴の道を通って、先へ先へと進んでいくから、それについて糸もこちらの穴から向こうの穴までつき抜けてしまうようになるのだよ。」といい聞かせました。

お百姓はそう聞くと小踊りをして、さっそく殿様の御殿へ行って、首尾よく玉の中へ絹糸を通して見せました。

殿様はびっくりして、こんどもお百姓にたくさん、御褒美のお金をいただきました。

お隣のお使いは絹糸のりっぱに通った玉を返してもらって、逃げて行きました。

その使いが帰って来ると、お隣の国の殿様も首をかしげて、「信濃国にはなかなか知恵者がいるな。これはうっかり攻められないぞ。」と考えていました。

こちらでも、さすがにこれで敵もあきらめて、もう来ないだろうと思っていました。

ところがしばらくすると、またお隣の国の殿様から、信濃国へお使いが手紙を持って来ました。手紙といっしょに二匹の牝馬を連れて来ました。

「いったい馬なんぞを連れて来てどうするつもりだろう。」とびくびくしながら、殿様が手紙をあけますと、

「二匹の馬の親子を見分けてもらいたい。それができなければ、信濃国を攻めほろぼしてしまう。」と書いてありました。

殿様はまた、連れて来た二匹の馬を見ますと、大きさから毛色まで、瓜二つといってもいいほどよく似た馬で、同じように元気にはなっていました。

殿様は困ってしまって、また家来たちに相談をしました。

それでもだめなので、また国中におふれを回して、「だれか馬の親子を見分ける方法を知っているか。うまく見分けたものには望みの褒美をやる。」と告げしらせました。

また国中の大さわぎになって、こんどこそうまく当てて、御褒美にありつこうと思う者が、ぞろぞろ殿様の御殿へ、お隣の国から来た二匹の牝馬を見に出かけました。

ところがよほど見分けにくい馬と見えて、名高いたくろうの名人でも、やはり首をかしげて考え込むばかりでした。

そこでお百姓はまた穴倉へ行って、おかあさんに相談しますと、おかあさんはやはり笑って、

「それもむずかしいことではないよ。亡くなったおじいさんに聞いたことがある。親子の分からない馬は、二匹を放しておいて、間に草を置けばいい。

するとすぐ草にとびついて食べるのは子供で、ゆるゆると子供に食べさせておいたあとで、食べ残しを食べるのは母親だということだよ。」と教えました。

お百姓は感心して、さっそく殿様の御殿へ行って、「ではわたくしに見分けさせてくださいまし。」といて、おかあさんに教わったとおり、二匹の馬の間に青草を投げてやりますと、

案の定、一匹がががつがつして草を食べる間、もう一匹は静かに座ったままながめていました。

それで親子が分かったので、殿様はそれぞれに札をつけさせて、「さあ、これで間違いはないでしょう。」といて、使いにつきつけますと、

使いは、「どうも驚きました。そのとおりです。」といて、逃げていきました。

殿様は、お百姓の知恵に心から驚いてしまいました。「お前は国中一番の知恵者だ。さあ、何でも望のものをやるぞ。」といました。

お百姓はこんどこそ、おかあさんの命ごいをしなければならないと思って、「わたくしはお金も品物もありません。」といますと、殿様は妙な顔をしました。

お百姓はすかさず、「その代わりどうか母の命をお助けください。」といて、これまでのことを残らず話しました。

殿様はびっくりして、目を丸くして聞いていました。

そして灰の縄も、玉に糸を通すことも、それから二匹の牝馬の親子を見分けたことも、みんな年寄りの知恵で出来たことが分かると、殿様は今更のように感心しました。

「なるほど年寄りというものもばかにならないものだ。度々の難題をのがれたのも、年寄りのお陰であった。

母親をかくした百姓の罪はむろん許してやるし、これからは年寄りを島流しにすることをやめにしよう。」

殿様はそういって、お百姓にたくさんの御褒美をくれました。そして年寄りを許すおふれを出しました。国中の民は生き返ったようによろこびました。

お隣の国の殿様もこんどこそ大丈夫と思って出した難題を、またしても簡単に解かれてしまったのでがっかりして、それから信濃国を攻めることをやめました。

日本昔ばなし「姨捨山」は、いかがでしたか？

あなたの国の童話や昔ばなしをコメント欄から是非みんなに教えてください。

今後の動画制作に活かしますので、コメント欄から感想いただくと大変嬉しいです。

それでは、また別の動画でお会いしましょう。



**Japanese-listening-SUSHI**

